JICA シニアボランティア 千葉
SV ニュース
第 8 号

第五回定例会開催

第五回定例会が平成十九年十二月八日（土）午後一時三十分より午後四時まで、千葉市国際交流プラザで開催されました。

出席者は会員および新帰国者で三十三名でした。来賓としてＪＩＣＡ広尾センター地球ひろば）事業連携グループ グループ長 仁田知樹氏、ちば国際コンベンションビューロー専務理事 鈴木正一氏、千葉県総合企画部政策推進室国際政策グループ副主幹加瀬文彦氏およびＪＩＣＡ千葉デスク国際協力推進員 木野本まゆみ氏を迎えました。

定 例 会 会 場

冒頭に品川会長の挨拶のち、仁田知樹氏から「人間の安全保障とボランティア事業」、鈴木正一氏から「ちば国際コンベンションビューローと国際協力」との演題で講演を頂きました。講演の内容は本紙二頁に掲載してあります。

来　　賓
写真右より 仁田知樹、鈴木正一、加瀬文彦の各氏

引き続き活動状況報告に移り上田事務局長より「今年度総会以降の活動概要」、山本茂穂幹事と堀端俊雄ウエブマスターから「ホームページ、ＳＶニュース」関係の経過、増田定雄幹事より「開発教育国際理解教育」関係の推進状況について報告がなされました。

次いで品川会長より当会の役員登録制度」について、概要説明があり積極的に登録することへの要請がなされました。

最後に上田事務局長の司会により当日出席の帰国シニアボランティアの自己紹介がありました。帰国された方々の氏名、任国、活動内容は次のとおりです。

手塚　栄（トルコ、省エネルギー指導）、若林和春（ケニア、職業訓練校、電子機器）、阿部清司（アルゼンチン、政策経済大学院、日本政治経済）、井原欣二（フィジー、職業訓練センター、経営管理）、金子泰之（タイ、工業省裾野産業振興局、物理気相成長法）、児玉東洋（チュニジア、科学技術大学、廃水処理）

上田事務局長による帰国シニアボランティアの紹介

次いで黒田副会長の進行により会員よりの意見交換に移り草の根協力活動、案件の発掘、出前講座についての質疑が行われました。

総合司会には黒田副会長、書記には白鳥貞夫会員と羽田享会員があたりました。

黒田副会長の閉会挨拶のち恒例の派遣地域別懇親会の会場に移動しました。

平成二十年度通常総会日程
日時　二十年五月三十一日（土）
　　午後一時～四時
　　引続き懇親会を予定
会場　千葉市国際交流プラザ

特別寄稿
「知」の伝承

千葉大学教育学部
教授　吉田 雅巳

近年海外の学会に参加する度に他国の研究者、報告される研究の趣が変わってきていることに気が付く。

先進国から来た研究者も開発途上国から来た研究者も同様にこれまでの教育機関の枠組みを超えた新たな人材開発の方法を積極的に追い求めている。組織内の学生のみを対象にした「閉じた」人材開発から飛び出した、社会における教育機関の使命を意識し、地域社会、市民を対象とした「開かれた」人材開発の出現である。国情により方法の違いはあるが、共通して世界的潮流である知的社会を目指した創発の動きが見られる。

このように世界のグローバル化と情報化社会の発展は、既に経済のグローバル化、知識のグローバル化に展開しており、決して物流の世界化に留まっていない。

日本は人口だけを見ると世界で僅か一・七パーセントでしかない。それでも日本語は世界第九位の母語者数で、日本語学習者は全世界に約二百三十五万人存在する。

ハワイでの国際教育会議（講演者が筆者）

タイでの大規模な人材開発国内会議（タイ教育省提供）

一方、コミュニティベースで編纂・追記されているインターネット百科事典のウィキペディアでは、日本語は総記事数四十五万で世界第五位、インターネット総素材の言語別調査では全体の八・四パーセントを占めて世界四位である。人口レベルでは世界の二十二パーセントあまりを占めて第二位の中国でもウィキペディアの総記事数では中国語が十二位であることから考えれば、日本の「知」の世界における存在感は決して小さくはない。

国際化を英語の習得と理解して語学訓練に偏重していた時代は、知的社会の到来と主に変化している。多くの開発途上国は、英知を母国語で理解しようとしている。しかし容易ではない。

世界の数ある言語の中でも初等教育から博士レベルまでの知識を網羅しているのは英語を除くと日本語、中国語、ロシア語だけと聞いている。幸い我々は様々な「知」に身近な日本語を媒介にして触れることができる。その「知」の経験が、世界レベルで貢献可能な時期が来ているのではないだろうか。

実際、人生の経験を生かして貢献可能な場面は国際協力では少なくない。多くの開発途上国の課題は機材や予算、情報の問題ではなく、システムの問題であるからだ。

他方、国際化社会に対応した次世代を担う日本の若者の養成も重要である。私の研究室では、千葉県ＪＩＣＡシニアボランティアの会と協力して、貴重な海外での国際協力業務経験を学生さんに伝える授業を本年度より開講する。情報から「知」の伝承、それは国の内外にわたる現代日本の重要課題である。

来賓挨拶

人間の安全保障とボランティア事業

(独)国際協力機構 広尾センター
事業連携グループ長　仁田知樹

早いもので、JICAが独立行政法人として新たな船出をしてから、四年の月日が流れましたが、その間JICAは一貫して「現場主義」、「人間の安全保障」、「効果・効率性と迅速性」という三つの柱をテーマに掲げて改革を進めてまいりました。

現場のニーズを的確に把握して現場の目を活かした事業運営を目指す「現場主義」と組織体制や手続きの簡素化などを通じて業務の合理化を進める「効果・効率性と迅速性」は、まさに読んで字のごとくの重要な改革テーマですが、もう一つのテーマ「人間の安全保障」につきましては、私自身、いつもその意味するところを自問自答しながら業務を行ってきました。

従来、国家がその国民と国境を守るというのが「安全保障」の概念でしたが、現在では紛争の多発、地球環境の悪化、武器・薬物や感染症の拡大・拡散といった国家の枠組みを超えた問題が深刻化し、国家による安全保障だけでは個々の人間の安全を守ることが困難になったことから、一人ひとりの命の尊厳や生活を守るために必要とされるのが「人間の安全保障」という概念です。

これまでのJICAの事業は、途上国の行政能力の向上を支援することによって国の発展を目指す「上からのアプローチ」が中心でしたが、「人間の安全保障」の概念の中では、コミュニティーやそこに暮らす人々に目線を合わせて「生きる力」を引き出す「下からのアプローチ」を同時に展開していくことを目指しています。

私は、JICAの伝統的プログラムである「ボランティア事業」こそが、実は日本が世界の途上国で長年にわたって実践してきた「人間の安全保障」事業だと思うのです。

JICAの派遣するボランティアは、途上国の草の根に分け入って、そこに暮らす人たちのニーズを汲み取り、彼らと手を取り合いながら活動を展開しています。一人ひとりのボランティアにできることは決して大きくはないけれど、こうした住民の目線に立ったゲリラ戦こそが、「下からのアプローチ」にほかなりません。

国家レベルの対話を通してシステムや体制を構築する「上からのアプローチ」に、草の根のニーズに現場で応えるこうした「下からのアプローチ」を的確にマッチングさせて事業を展開することが、まさに「人間の安全保障」のアプローチなのだと思います。

こうした観点から、二〇〇八年度に無償資金協力や円借款事業を含めた一元的総合援助機関に移行するJICAにとって、ボランティア事業の重要性は益々増大していくものと確信しています。

一般市民の参加を基本とするボランティア事業を一層充実・発展させていくためには、途上国経験を日本社会に還元し市民の関心と参加意欲を促す貴会のような活動が欠かせません。

JICA地球ひろばは、今後も、貴会のこの「国内版・人間の安全保障活動」と連携し、市民への積極的な発信を行っていく所存です。貴会の継続的なご支援をよろしくお願いいたします。

ちば国際コンベンションビューローと国際協力

(財)ちば国際コンベンションビューロー
専務理事　鈴木正一

本日は「コンベンションビューローと国際協力について」のテーマですが、国際交流・国際協力とも関連があるコンベンション事業の方から、お話しさせていただきます。

「コンベンション事業」については、まず国際会議が頭に浮かぶと思いますが、皆様の中には、過去、色々な機会に国際会議に参加された経験がおありになると思います。私どもビューローでは、千葉県に年間百二十件（二〇〇六年度）の国際会議や国内会議を誘致する活動をしています。誘致するばかりではなく、開催が決まった会議には、主催者であるオーガナイザーに対し色々な開催支援もしています。経済波及効果は、二〇〇六年度で推計八〇億円となっています。

日本全国では、JNTO（国際観光振興機構）の統計によると、三千五件（二〇〇六年）の国際会議が開催されています（対前年五・一％増）。しかし、世界における日本の実績順位は近年下がり続けており、UIAと云う欧州の国際会議機関の発表では、最近では韓国にも抜かれ、アジアではシンガポール、中国、韓国についで四位に甘んじています。このため、昨年安倍前総理が所信表明演説で、五年後の二〇一一年までに、国際会議の開催件数を五十％増にする宣言をしました。小泉首相の時から始めたVJCキャンペーン（訪日客を二〇一〇年までに一千万にする）と相俟って、日本における国際会議を増やそうと言う計画です。本年には、日本でG-8サミットが北海道洞爺湖で開催されますが、これに先駆け、千葉県では本年の三月に「G-20ちば2008」として幕張メッセで、気候変動などに関する閣僚級対話が開催されます。千葉県は環境問題に力を入れており、堂本知事を先頭に千葉県ではこの会議の成功に向けて取り組んでいるところです。

国際会議は、出席者の多くが各国の各専門分野を代表する方々のケースが多く、開催地として千葉県で実施されることは、大きな地域のPRになり、経済効果や文化交流も促進され、結果として大きな国際交流につながります。国際コンベンションには、当財団のボランティアの皆さまにもお手伝いを頂いています。

地域の活性化には、このようなボランティアの積極的な参加が不可欠で、会議主催者が大いに期待しているところでもあります。

千葉県における国際協力については、以前からNPO民間団体の皆さまの努力で推進されているところですが、千葉県では、具体的にベトナムとの交流を進めています。これは、三年前に堂本知事が、千葉県として持っているさまざまな技術、ノウハウ等をどういう形で活かせるか、地域からの国際協力として何ができるか、と言う命題に対し現地を視察しその可能性を探るため視察団を派遣しました。

この視察ツアーは私にとって国際協力がどういうことか、をかなり具体的に教えてくれる、誠に理解しやすい内容でした。まさに百聞は一見に如かずで、このような分かりやすい現地での体験をした日本人は、草の根の国際協力の現場は、かくあるべし、と感じることができます。千葉県における国際交流に関する啓発活動を進め、県民の一人でも多くの人が参加できる様に、コンベンションビューローもお手伝いしたいと思っています。

活動トピックス

第四回帰国報告会

第四回千葉県ＪＩＣＡシニアボランティア帰国報告会がＪＩＣＡとの共催で二月二十四日（日）午前九時半より午後一時まで浦安市国際センターで開催されました。

平成十九年帰国の八名の会員から任国での活動、現地での異文化体験、任国の様子などの報告がありました。

冒頭、ＪＩＣＡ地球ひろば千葉デスク木野本国際協力推進員および当会の品川会長の挨拶の後、各報告者は映像を中心に発表を進め、それぞれ持ち時間（二十分）に収まりきれない位の報告、質疑応答がなされました。

当日は強風による大幅の列車ダイアの乱れにも拘らず、参加者は一般市民を含め四十名を越す満席の盛況でした。

報告者の氏名、演題は次のとおりです。（報告順）

○児玉東洋氏（チュニジア／メンブレン研究指導／千葉市）
課外活動の楽しみ」

○酒井徳子氏（チュニジア／随伴家族／千葉市）
楽しかった随伴生活」

○山岸 隆氏（マレーシア／一般廃棄物処理／松戸市）
「マレーシアのボランティア体験」

○井原欣二氏（フィジー／経営管理／千葉市）
「フィジー障害者職業訓練所での経営指導」

○若林和春氏（ケニア／産業機器／流山市）
「ケニア職業訓練校の新米講師」

○小松秀世氏（ボリビア／水理地質／大網白里町）
「多くの感動をありがとう」

○加藤真理氏（ブラジル／日本語教育／市川市）
「ブラジルにおける継承日本語教育」

○阿部清司氏（アルゼンチン／日本政治経済／千葉市）
「アルゼンチンのラプラタ大学社会人向け大学院クラス」

最後に浦安市国際センターの伊東センター長より今後は一般市民への広報をより十分に行いたいとのご挨拶を頂き終了しました。

アンケートの結果では映像がよく整理されていた、具体的で理解し易かった、報告時間が短すぎる、これからの応募希望者のために応募動機や事前準備についてもより詳しく聴かせてほしい、話のポイントを絞った方がよい、などの意見が寄せられました。

終了後の懇親昼食会では、お互いの親睦とさらなる情報交換がなされました。

千葉市支部活動

【千葉市国際交流協会助成事業】

『講演会の開催』

日時　十月十三日（土曜日）
於　千葉市国際交流プラザ

団塊の世代を対象にした定年・子育て後の第二の人生を如何に活き・生きと過ごしていくか」をテーマとして取り上げ、選択肢の一つにＪＩＣＡのシニア海外ボランティアへの挑戦を紹介、進言する講演会を開催しました。

岡本芙佐子会員のシニアボランティア活動体験講演

事前に広報活動に務めたこともあり、五十数名の一般参加者を迎え、盛会で終えることができました。

講演の内容は当会の横田勝徳幹事と岡本芙佐子会員による派遣国での活動体験談と、吉田雅巳 千葉大学教授及び山浦 衛 千葉市会議員による特別講演で、いずれの講演も好評でした。

吉田雅巳教授の特別講演

『在住外国人への日本語指導・通訳補助・生活相談等の出張サービス』

潜在需要が多いとの見込みで事業化しましたが、効果的な広報活動が軌道に乗らず、今期は不本意な結果に終わりました。

なお、当会の国際理解・開発教育推進の一環として、千葉大学教育学部 吉田教授の平成二十年度カリキュラムの中で、会員が国際協力業務に従事した経験について講義する計画があります。千葉市支部が窓口となり準備中です。

（千葉市支部長　上田義晴）

ＪＩＣＡシニアボランティア募集説明会参加

ＪＩＣＡシニアボランティア 秋募集体験談＆説明会が十月十三日（土）に船橋会場、十月二十日（土）に幕張メッセ会場で開催され、当会会員も協力参加しました。

【船橋会場】

パネリスト
羽田 亨、藤田正三 両会員
よろず相談員

会　場　全　景

【幕張メッセ会場】

パネリスト
加藤真理、酒井國彦 両会員
宮崎征士、飯島麻夫 両会員

よろず相談コーナー
右側　後藤(手前)、浅見両会員

会員寄稿

ヨルダン見聞体験記

大格　登（ヨルダン）

中東安定の要の国と言われるヨルダンで二〇〇五年四月から二年間活動してきた。勤務先は首都アンマンから南へ二百二十キロメートルの砂漠の街マアン市の市役所で、指導科目は廃棄物処理。任期最後の五ヶ月は依頼によりアカバ経済特区（ASEZA）の環境・設備安全・労働安全衛生の指導業務も兼務した。

マアン市はヨルダンで最貧市町村の一つで、人口四万弱、住民の半数は放牧の民ベドウィン。行政区域は四十五平方キロメートルに亘るが、土地の九十五パーセントは荒涼たる砂漠。三週間のアンマンでの研修中、住居探しを兼ね任地へ挨拶に行った。

「地球の歩き方」には「三軒のホテルあり」と記載されており、見に行くと名前とは大違い。部屋は小ベッド五、六台並べた相部屋、事務机なし。トイレはアラビア式共同トイレ。紹介されたアパートはだだっ広く、入口ドアが二つ、家具はなく、寒々とした雰囲気。ここヨルダン南部はイスラム教スンニ派の保守的な地域で酒類は販売厳禁、成人女性の多くは頭から爪先までをすっぽり黒衣で覆い、見えるのは両眼と両手先のみ。「アルコール無しでこの地マアンで二年間暮らせるか」これが最初に問われた課題。

車を雇い、ホテル、アパート探しを親切なパレスチナ人運転手の案内で更に二回、結局住居はヨルダンの南端の港町アカバと決定。ここから百十六キロメートル北東のマアンまでデザートロードを片道二時間半バスで通うことにした。

四月二十五日着任。事情があり三人のカウンターパートを決めてもらう。市長のK氏、地域リーダーで医者のY博士とその親友A氏）。何れも四十歳台半ばの知性溢れる敬愛できる紳士。数日間カウンターパートより市の歴史、財政事情、ゴミ収集・処理の現状等の詳しい説明あり、ゴミ収集・埋立の現場も見せてもらう。その直後市長より相談あり、曰く『EUが貧困基準で選ばれたヨルダンの五十の市の中から「企画力と実行力」により十八の市を選定し、計三千万ユーロの資金を提供する。就いてはマアンも企画書を作成、応募したい。既に二案件準備中、貴殿には「環境・リサイクル」の分野で第三案を作成して欲しい、中央政府への提出期限は五月十五日、OKか』と。温めていた構想があり、OKと即答。四日間ホテルに籠り、我孫子市の情報協力も得て企画書九枚書きあげる。表題はゴミの分別回収・リサイクルを目指す『リサイクルセンター計画』。Y博士とA氏起案の二件と併せた企画書を政府（国際協力・企画省MOICP）へ提出。

EUワークショップにて
筆者（中央）の右がY博士、左がA氏
両端は地域リーダー

半年後マアンが企画力ナンバーワンの評価を得て、EU主催のワークショップが他市に先駆けマアンで開催され、地域リーダー二十三人で実行計画討議。その最終日EU代表から三千万ユーロの資金を直接提供するとの発言あり、市全体が沸き立ち、小職の名も知れ渡った。しかし「MOICPの思惑」で結局はEU資金はMOICPが一括して握り、市が計画したプロジェクト資金は与えられず、無用の「市職員等の研修ワークショップ」が開催されることになったのみ。市民は集会を開き「MOICPの腐敗体質」を大いに怒り、国王へ訴えようとの意見も。

ゴミ処理問題の指導は我孫子市の「市民協力の分別回収・ゴミ処理のビデオ」を用いて市職員・市民へのワークショップ開催や、環境省主催（一度JICA共催）のワークショップでの講演が主であった。又、日本大使館へ中古ゴミ収集車寄贈の申請やゴミ収集システム改善の資金援助の申請業務も市の企画部職員の如き立場で行った。

ヨルダンでの生活・市民との交流は快適であった。カウンターパート、マアン前市長、市議会議員、現地友人などから家庭への招待も何度も受けた。前市長には何回目かの家庭招待時「世話するから妻を娶れ」と、これには一寸当惑。「日本人は残念ながら法律で妻は一人しか持てない旨定められている」と辞退。

興味深いことは特例を除いて、その家の主婦は裏方で客席には顔を見せないこと。家の主なり息子なりが食事を持って来るほか、全ての来客サービスをする。

一方、カウンターパートを含め、多くのヨルダン人から何度も受けた質問あり。それは「日本は廣島・長崎に原爆を落とされ、一度に十数万人も殺されたのに、何故アメリカと仲良くやって行けるのか？」と。皆さんは何と答えますか？　カウンターパートのA氏の奥さん（豪州生れのトルコ人）は三度目の訪問では話しに加わり、家を辞するとき態々追いかけて来て、「一つ尋ね忘れたことがある」と上記質問をされた。

ヨルダンの女性の地位は家庭内では力があるが社会的には低い。未婚女性の男女交際には厳格な制約あり。違反が発覚して父親や兄弟に殺される例が毎年十五件くらい発生。所謂「名誉の殺人」（Honor Killing）。父親より兄弟が手を下すことが多い。理由は法で禁止されてはいるが「名誉の殺人」として届け出ると刑罰は若年者ほど軽く、入獄半年位の刑罰で許されるケースが多い。

観光都市・経済特区指定のアカバは、酒類の販売も自由、酒税なし、首都アンマンの半額で買える（但し、イスラム教徒には販売できない）。任期最後の八ヶ月はY博士・A氏の親友で好人物のI氏が市町村開発銀行のマアン支店長からアカバ支店長に栄転の際は、Y博士からの相談により我がアパートに居候させることを了承、楽しく有意義な共同生活を送った。カタールTVアルジャジーラを毎晩一緒に観て、意見交換できたのは得がたい体験だった。この銀行は多くの貧しい市町村への

融資・職員研修の支援も行っており、彼と共に多くの市町村の研修現場を訪れ、そこの職員や市民と交流することもできた。

ヨルダンは国の収入の約三十％は米国、EU、日本等からの資金援助で成り立っていて、政府の汚職も目につき、国民は肉体労働を嫌う「恥の文化（Culture of Shame）」の影響もあり、勤労意欲今一つの感があるが、日本と日本人に対しては尊敬の念を持っている。これは日本が高度技術の国で、アラブの世界で嘗て手を汚していないこと、更に米国から原爆の被害を受けた国であることも一因と思われる。カウンターパートほか、親しくなった友人とは現在も親しく交流を続けている。

楽しかった随伴家族生活

酒井徳子　（チュニジア）

夫が派遣されたチュニジア国の首都チュニスは、アフリカではトップクラスの近代国家ぶりを誇り、インフラも整備され、他の国のように水が断水ばかりとかガスが無いとかの不自由はありませんでした。

しかし、日本食材料を売る店がひとつも無く、お米が手に入らないので日本へ一時帰国の折に米や醤油を運び、毎食和風に調理。ごはんは毎食食べられないので、細いパスタをそうめんふうにとか、お好み焼きや堅いパンを柔らかく食べる工夫をしました。

デパートなど無いので古着市に行くのが、ささやかな楽しみで、皆で行けば安全なので誘いあわせてタクシーで次々に迎えに行って通いました。古着市は世界遺産メディナの奥、観光客が行けない場所や市内から離れた町で開かれていて、主に女性で賑わっています。青空の下、ベニヤ板二枚位の大きさのテーブルに山のように積まれて、服は男女別々に子供服、靴、下着、玩具、カーテン、パジャマ、スカーフ、バッグ、皮革製品、テーブルクロス、ブラジャー、ストッキングなどが並びます。値段は先客の地元の女性にこの台の品物はいくらですかと聞いてから一枚ずつ広げて選びます。一枚日本円で九十円が多く、日本でも買えるブランド服も多いので真剣に探し、バーバリやエルメスが見つかると大喜び。ヨーロッパから船便でくるらしく古着といってもきれいで、毛皮は北欧製品でミンクも安かったです。たまに高い値段の品物があり、逆にたった四十五円の品物もありました。

午前の二時間があっと言う間に過ぎ、お昼は地元の人と一緒に立ち食いのカッフェで焼きたてパンと絞りたてのオレンジジュースですませて、午後も二時間位古着の山に挑み楽しい一日が過ぎるのでした。帰るとすぐに着ていた服と買った服を洗濯機にいれ、洗えない物は日光に干します。不自由な生活のなかでいつも楽しかった買い物でした。

シニアの生きがいとしての海外ボランティア活動

加藤眞理　（ブラジル）

三月に入り、梅の便りとともに、桜の待ち遠しい季節になりました。

ブラジルでは、カーニバルが終了し日本語学校にも生徒達が戻り、新学期を迎えている頃だと思います。

今回、原稿依頼を頂戴し、私の拙い経験を披露させて頂きながら、シニアだから出来るボランティアについて皆様にもお考え頂けたらと思っております。

以前、近所の公民館で外国人に日本語を教えているボランティアの姿を目にし、自分もいつか日本語を教えてみたいと思っておりました。それで、民間企業（広告代理店）を早期退職し、日本語教師養成学校に入学しましたが、「日本語を教える」という事は予想に反してとても難しく、頭が混乱することが何度もありました。折悪しく、養成校卒業を迎える頃に日本語学校の経営を左右するような入管制度の一部改正があり、国内での就職は難しい状況を迎えました。最初からボランティアが目的だったこともあり、ボランティアで日本語を教えながら、他の勉強をしておりましたが、幸運にもJICAの試験に合格し、ブラジルで日本語を教える機会に恵まれました。

海外での活動の魅力、海外だから出来るという事の一つに、様々なしがらみや家事から解放され、仕事だけに没頭できるということが挙げられると思います。

指導の対象は主に日系人の先生でしたが、一世から三世まで境遇も年齢も様々な二十五人の先生方に、主に文法や授業中の指導の仕方、授業の準備についてアドバイスしました。ブラジル人の若い男性の先生も一人いて、その先生にはポルトガル語を教えて貰いつつ、指導法や授業前の教師の予習の必要性を教えました。彼は現在、何人かの日本人にポルトガル語も教えていますが、授業が楽しいといわれていると聞き嬉しく思っています。

私は日本語教師としての経験は浅かったのですが、ブラジルの日本語学校には年間を通して色々なイベントがあり、民間企業での経験の全てを活かすことができました。シニアだからできたのだと、歳を重ね経験を積むことに意味があることも知りました。

運動会での組体操を企画、指導

受け入れ側も、四十歳そこそこのシニアより五十代以上のシニアの方が、人生経験を積んでいる分、少々の意識のズレ等でギスギスすることもないので受け入れやすいと仰る方もいました。また、一所

懸命活動していても「どうせ二年間で帰る人なんだから本腰を入れて仕事なんてしてくれないだろうし、名前も覚えない」と言われガッカリすることも有りましたが、今振り返ると、忙しかったですが充実した日々と楽しい思い出しか残っていません。

同行した林間学校の生徒達とのスナップ

今年、ブラジルに日本人が移民し百周年を迎えます。一年を通し様々な行事が企画されているようですが、百年の間に一世から二世、三世、四世へと世代交代が行われ、確実に日系社会も変わっていくと思います。

また、日本への就労などで、日系人も様々な複雑な問題を抱えています。日本国内にもブラジル出身の日系人だけで三十万人、そして一日平均十人の子供が誕生していると聞きます。今後、私に何が出来るかわかりませんが、JICAでの経験を活かし、今後も何らかの形で国内外でのボランティア活動をして行きたいと思っています。

フィジー職業訓練所での経営管理

井原欣二　（フィジー）

二〇〇五年十月、私と家内は成田空港から一路フィジー共和国のナンディ空港へと向かった。いよいよJICAの国際協力で二年間仕事を始めるのかと思うと期待と緊張が入り混じった複雑な気持ちになった。

約九時間後、飛行場に着き出口ゲートに向かうと向こうの方から楽しそうな音が聞こえてきた。飛行場のスタッフ達がギターを弾きながらフィジアンソングを歌って乗客を歓迎してくれていたのだ。最初にこんな出迎えを受けたので私はフィジーの人達の親密さにすっかり溶け込んでしまった。

フィジー国は日本の四国と同じ位の大きさで人口百万人足らずの小さな国である。南大洋州にあり気候も温暖である事から観光産業とサトウキビ栽培が国の主な収入源であり日本からの観光客も多い。しかしながら、人種はフィジー人が五十％、インド人が四十五％もいることから人種間の微妙な問題が潜在的に存在しており後日、大変な経験をすることに・・・。

私の勤務先は首都スバにあるフィジー障害者職業訓練センターであり、仕事は当センターの経営管理であった。

現地に赴任後、約三ヶ月間かけて実情を調査したところ、当センターはここ数年赤字経営を余儀なくされ経営管理が適正に行われていないことが大きな問題であった。収益改善対策、目標管理の徹底、経営管理資料の作成、コンピューターによるシステム化の推進、情報の共有化等課題は山積していた。

スタッフとの入念な打合せ

これ等の状況に鑑みセンターとしての問題点九項目、改善の為の具体的実行策六項目を纏め マネージャー、スタッフ達と合同会議を開き今後二年間の行動方針、各自の計画、具体策を確認しキックオフした。

スタッフ達はこれまで計画など作成したことが無く説得するのに苦労したが、何とかそれらしい物が出来上がった。

またフィジースタイルと言ってフィジー人特有の何事にも拘らず余り気にしない習性があり、会議の時間になっても集まらない、報告を求めていても間に合わない等ストレスの溜まることもあったが、発表時間を細かく決めたりする事により徐々に改善されていった。まさに三歩進んで二歩さがるようなことの繰り返しであった。

これまで手作業でやっていた経理をMYOB経理ソフトの導入によりコンピューター化するのに一年もかかったが、完成後は経営管理データの把握が容易になり運営がやりやすくなった。

収益改善活動、コスト削減活動の結果これまで赤字ベースであったものが、赤字初年度は若干のマイナス、二年目はなんとか黒字の目処を立てて帰国出来たのでこのペースを継続してもらいたいと念じている。

赴任約一年後の二〇〇六年十二月初旬、当時の首相と軍司令官による対立が表面化しクーデターが勃発した。現地JICA所長の指示により我々シニアボランティア、青年海外協力隊員、JICA専門家は首都スバからナンディへ緊急退避し張り詰めた三週間を過ごした。発展途上国の厳しい現実を目の当たりにした日々は、今となっては思い出だが、忘れる事は出来ない。

日常生活は年間の八割は半袖シャツで過ごせる温暖な気候なので暮らしやすく果物もマンゴ、パパイヤ、パインナップルと豊富でしかも非常に安い。魚も新鮮なものが食べられるので、いつか又訪れてみたいと思っている。

ラプラタ大学大学院社会人向けクラス

阿部清司　（アルゼンチン）

赴任先の大学院　アルゼンチンでは国立ラプラタ大学は三指に入る有名な大学である。その法学部は前キルチネル大統領とその配偶者（現大統領）が共に学んだ学部である。在学中の成績は奥さんのほうがずっと優秀であったと言われている。その法学部に属するのが赴任先の大学院であり、そこには全国から参加がある。私

はラプラタ大学国際研究所日本研究センターに配属され、国立ラプラタ大学法学部国際関係論大学院で社会人向け大学院クラスを担当していた。私の任務は「日本政治経済研究」であり、アルゼンチン経済との比較を含む。なお、私の専門は国際経済論である。院生は皆昼間は働いている。日本の大学院生のように、昼間から勉学にいそしむ環境は当地にはない。授業は夜七時から九時半ないし十時まで続く。疲れていても注意が散漫になることはない。彼らの多くは弁護士（abogado）である。そのうちの一人は議員（diputado、ブエノスアイレス州下院議員）であり教えられることが多かった（例、アルゼンチンの良い点の指摘。）

意思疎通、言語、教材　早口でなされる院生の質問のなかに不明なカステジャノ（南米スペイン語）の語句が出てきて私がこまっていると、すぐ周りの院生や助手が教えてくれる。質問の意図が伝われば私も正確に回答できる。教えることは教えられることであると拙著に書いたが、このことはアルゼンチンでも真実である。当地の学生の日本政治経済に対する知識はゼロである。そこで日本の文化、歴史、社会、伝統などから始めた。問題は用いる言語である。英語ができない院生が多いので、不慣れなスペイン語で教えなければならない。スペイン語教材を探したが、現地ではなかった。そこでJICAの日本紹介のDVD（スペイン語、広尾で入手）を使うことにした。千葉大学で使用してきた留学生向けの教材を併用した。どんな質問にも応じられるよう準備が続く。

毎回鋭い質問が続出
パソコンとプロジェクターを多用

クラスで議論する内容　日本の工場のなかの生産性向上運動（QC）などを紹介しても皆は無関心である。これでもかこれでもかと日本の最先端の工場の美点を見せ付けられ、ため息をつく年配の会社員院生もいる。アルゼンチンでは脱工業化（desindustrialización）が進行中である。日本との比較には細心の注意が求められる。彼らの関心をひく大きなテーマは何か。アルゼンチンが一次産品の輸出に活路を見出すことは昔も今も変わっていない。ある優秀な会社員院生は、「どうしたらアルゼンチンはもっともうけることができるか」、と質問してきた。付加価値を付けることが大切であると即答し、詳しく論じるには一冊の本が必要であるとも付け加えた。国際競争力とはなにか、どうしたら付加価値を実際に付けられるか、どの産業から手をつけたらよいか、コンセンサスを得られるのか、提案はどの程度実行されるのか、政策に一貫性は保てるのか、政府と民間の協力はどうか、長期的な横の連携はどうか、などなど課題は山積している。これらの課題を示され、彼はうなずいていた。

上記のDVDの内容をそのままを伝えても効果的でないということが分かるまで時間がかかった。それが分かってからはクラス・ディカッションがより活発になっている。日本には長所だけでなく短所もあることを知って安心するのか、日本の弱点の羅列は多くの関心を呼んでいる。少子高齢化の問題やそれに伴う日本経済の活力の低下などにも毎回興味が集まる。そのようにして共通の話題が増え、相互理解が増している。アルゼンチンで作られる多くの製品は国内で消費されている。そこで輸出依存度を院生と共に調べたら、輸出のGDPに対する比率は十・八％であった（二〇〇二年）。日本のそれも調べたら、同じ十・八％であった。その院生と私は互いに顔を見ながら思わず微笑んだ。一致の嬉しい一時であり、この喜びが職業人としての生きがいである。

回を重ねるにつれ、院生にどう質問たらより効果的であるか、少しずつ分かってきた。所得平等の進んだ日本を紹介したあとに、アルゼンチンはどうか、と訊いたことがあるが、「平等ではない、両国の違いはあまりも大きい」と指摘されてしまった。「日本のような生産性向上活動はアルゼンチンでも可能か」と訊いても彼らは戸惑うだけである。議論はそこで止まってしまう。当地に全く無関係な事に関する質問などは避けたほうが賢明であると分かってきた。

結びに　もちろん不備は沢山ある。院生は修士論文や博士論文の書き方を知らない。指導は個々の教授に委ねられ、横の連携は薄い。体系的な大学院指導がなされていない。しかし、優れた良心的な院生は沢山おり、彼らの将来が楽しみである。学んだ知識を彼らが共有してアルゼンチンのより明るい将来のために一緒に協力する時代が来ることを私は切に願いたい。院生と共通の話題を少しずつ増やせることは教育者としての大きな喜びである。そのようにして院生の日本に対する理解が深まり、日本の長所を少しでも取り入れて社会のために一致して働きたいという機運が皆の共通の理解の上に高まるならば、アルゼンチンの将来は明るくなるであろう。それは日本にとっても嬉しいことである。

折り紙の効用

児玉東洋　チュニジア

チュニジアは、地中海に面した北アフリカのイスラム教の国。といっても、いわゆる「ソフトモスリム」。若い女性たちは、ヨーロッパのファッションで街を歩き、携帯電話でメールや会話を楽しんでいる。女性の進学率や就職率も高い。ワインの生産国でもあり、金曜日以外は、酒類を購入したりレストランで注文することが出来る。

公用語はアラビア語だが、フランス語が通じる。面積は日本の半分で、その南半分がサハラ砂漠。カルタゴ遺跡など世界遺産が八つもある。

私は二〇〇七年十一月までの二年間、首都チュニスの応用科学技術大学で膜（メンブレン）を利用した排水処理の研究を指導した。一年目はテスト装置と膜を導入することに注

力し、二年目はテキスト&マニュアルの作成と染色排水を使用しての実験指導を行なった。アドバイザーに徹し、自ら考えて作業することの必要性を説き、「帰国しても機器が有効に活用され、自分たちの手で継続して研究出来る」ように、相手のペースに合わせて指導することを心掛けた。

とは言うものの、対象が若い学生なので、当初はコミュニケーションの取り方に戸惑った。日本のポピュラーソングとして「涙そうそう」「世界に一つだけの花」などを紹介したが、反応は今ひとつ。会話を重ねていくうちに、日本のアニメの人気が高いことが判り、思案の末に「ピカチュウ折り紙」を創作してみた。そして、学生、親子連れ、サッカー少年、床屋のマスター、タクシー運転手、大家さん、電話局や郵便局の窓口等々で所構わず配り、折り方を教えてみたところ、笑顔になり好評であった。

日本の折紙を楽しむ子供達

これが認められ、活動の後半には、日本文化紹介のひとつとして、イベント会場や小学校などで披露することとなった。そして青年海外協力隊の人たちにも、障害者施設などで活用してもらった。

一方、ペットボトルで「けん玉」「花瓶」を、トイレットペーパーやラップの芯で「万華鏡」「眼鏡スタンド」などを作り、分別とリユースの奨励活動も行なった。

これらの課外活動は、異文化交流のみではなく、ジェネレーションギャップを埋める手段にもなり、ボランティア活動の幅が増し、多くの場面で役に立った。

「ピカチュウ折り紙」は、折るだけでなく、顔を画いたり、指人形として遊ぶ楽しみもある。英語版、仏語版の折り方解説書を作成してあるので、皆さんに活用して頂けたら幸いである。

多くの感動ありがとう

小松秀世　ボリビア）

南米の内陸のほぼ中央、ボリビアは太平洋チリ側からアンデス西山脈を越え、四千㍍の高原平野から標高百㍍足らずのブラジル国境まで地形・地質変化の激しい条件下にあります。

国土のほぼ中心に位置するサンタクルスの県庁にあるインフラ局で二年間にわたって地下水開発関連業務に従事、昨年十一月に帰国しました。

あつい抱擁と頬ずりの挨拶、情熱的踊りや何事にも真剣で熱心な人々、世界一長大なアンデス山脈、広大な塩湖、エベレストと同様に四千㍍以上も広域な海底を持ち上げてしまう地球の造形力の凄まじさ等、人文的にも科学的にも多くの感動を貰いました。

ここの車社会は殆どが右側交通仕様に変えられた日本の中古車両で、市内交通はタクシーのほかにミクロと呼ばれている中小型のバスが主力。縦横に張り巡らされている路線網は番号と色で識別されているが、頻繁に巡回してくるバスには手を揚げ声で告げれば何処でも自由に乗降車が出来、1時間程市内大回りの観光を楽しんでも料金は二十三円均一で庶民の足としてはすこぶる便利な乗り物でした。

就業朝八時～夕六時で昼休みは二時間、タイムカードによる勤務管理、庁舎出入りのセキュリティチェック、ホームページは日替わりの広報システム、更には曜日毎の支給制服着用等、ここ県庁の勤務形態は想像以上に規律正しいものでした。

配属先の地下水開発・削井担当部署にあっては、誕生会や毎月の業務功労者表彰等で職場内の交流や意思疎通及び職務意識の向上を図り、更に現在ＩＳＯ９０００取得に挑戦中です。

掘削作業事務所での打合せ
向かって左が筆者

具体的業務としては、日本とほぼ同面積のサンタクルス県内の村落部で飲料水確保の為一九九八年に開始されたＪＩＣＡの地方地下水開発プロジェクトの実施でした。同プロジェクトにより技術・機材供与を受け、今では年間百余井に及ぶ開発を展開し続けています。多様な地形・地質条件下百～三百㍍の水井戸を三日に一井完成させ続ける技術・財政的手当が出来ております。

水質・水量の長期保全の為には削井時の資料を集積し、地下地質や水理を解明していく必要がありますが、残念ながら、シニアボランティア派遣の前提条件であった掘削井内調査用の電気検層機が在任中活用出来ない状態で実施が困難でした。八方手立てを尽くした結果でも導入が今年の三月過ぎとなってしまいました。

開発上の課題や地下水理の解析法、水量・水質の長期保全策、井戸以外の水源確保の技法等を整理し資料化した報告書を作成して任を終えましたが、一部持ち帰った古い資料を解析して活用技術の有用性を日本から再発信したいと考えております。

JICA供与機材と500井完成時の垂れ幕

温暖化問題等国や地域を超えた問題が多くなった昨今、グローバルな視点で現地の条件下で共に課題に挑戦していく、そうしたシニアボランティア活動を担うのは、経済・環境・エネルギー夫々に幾多の激しい変遷を経てきた団塊の世代の方々が最適と期待しています。

マレーシアでのボランティア活動

山岸　隆（マレーシア）

派遣先のボルネオ島サラワク州の州都クチン市は、マレー半島にある首都クアラルンプールと異なり、緑が多く人々も大変のんびりしています。マレーシアは貧富の格差は大きいものの二〇二〇年に先進国入りを目指しており、他の東南アジア諸国と同様に高度経済成長の真っ只中にあります。

日本車や日本製家電が街に溢れ、アジアのリーダーとして日本に対して非常に好意的で、派遣先の職員や街の皆さんも日本人の自分に大変フレンドリーであり、初めての海外生活にも拘らず、また、英語、マレー語ともほとんど話せなかったにも拘らず、楽しく生活し、ボランティア活動ができました。

私はサラワク州全域の環境保全を任務とする「資源環境審議会」に一般廃棄物処理のアドバイザーとして派遣されました。マレーシアでは、日本と異なり、ごみは焼却処理をせず埋立られていますが、以下のようなごみ処理の問題点がありました。①ごみ埋立地に関しては、何らの設備も持たず単に空地を埋立地としている場合がほとんどであり、環境汚染、特に水質汚濁の恐れがあるほか、その半数の埋立地で野焼きが日常化。また、生ごみも埋立られるため、悪臭だけでなく、蝿や蚊などが大量発生。②貧困地域や田舎では、各自治体によるごみ処理サービスのない地域が多く、ごみ不法投棄が日常化。③ごみに関するデータが整備されておらず、ごみ処理計画立案の支障となる、など。

ゴミ埋立地の視察
向かって左から二人目が筆者

私の活動は、上記の「問題点」に対応すると、①については埋立完了間際の数箇所の埋立地安全閉鎖計画（環境汚染防止対策を講じた埋立地閉鎖計画）を複数人の助言に基づき提案した。②については、生ごみが付着した資源ごみは回収されないため、これらの分別のほか、生ごみリサイクル（コンポスト）の導入促進を図った。③については、アンケート調査実施後、四十九箇所あるごみ埋立地のほとんどの現地調査を実施し、州内の全ごみ埋立地のデータベース化のための調査を終了した、などでした。

活動の課題に関しては、

(一) マレー人は自分の家庭を第一とし仕事はその次とする人が多く、仕事に対し積極性に欠ける職員が多いが、上司の評価を極端に気にする性癖を利用し、上司へのレポート作成の上で効果的な現地調査の仕方や改善点提案方法などを示すことで多少の指導ができた。

(二) 各自治体とのアポイントやホテル・交通機関の手配のほか、活動費用も派遣先の負担であるため、自分の活動も派遣先の積極性に左右されたが、幸いなことに、派遣期間の後半には派遣先が積極的となり、ある程度のスケジュール消化ができた。

(三) 現地の人からの直情報が重要であるが、マレー語で聞き取れないことが多く、貴重な情報を逃がすことも多々あった、などが挙げられます。

サラワク州は自然公園も多く、貴重な動植物がたくさん見られます。経済成長とともに、環境保全対策の重要性が増すのは当然で、その一端を担うことが出来たと思っています。

会員動静

『新会員紹介』

平成十九年十月以降の新会員をご紹介します。

井原欣二　フィジー
経営管理　千葉市
児玉東洋　チュニジア
メンブレン研究指導　千葉市
阿部清司　アルゼンチン
日本政治経済　千葉市
金子泰之　タイ
物理気相成長法　埼玉県　蕨市
酒井徳子　チュニジア
随伴）　千葉市
山岸　隆　マレーシア
一般廃棄物処理　松戸市
若林和春　ケニア
産業電子　流山市

『再派遣帰国者』

須郷隆雄　ブータン
農業経営　流山市
大格　登　ヨルダン
都市衛生　我孫子市
柏尾英彦　サモア
海運・船舶　浦安市
小松秀世　ボリビア
水資源保護　大網白里町
菅井啓祐　ドミニカ
総合地域開発計画　習志野市

『再派遣で活躍中の方々』

高木利公　タイ
情報・広報
北垣勝之　ヨルダン
人的資源一般
豊永俊之　チュニジア
教育
木内良郎　メキシコ
鉄鋼・非鉄金属
寺田博義　タイ
商業経営
浦山和良　マラウイ
商業経営
濱崎　丘　アルゼンチン
環境問題
及川淳一　ボリビア
機械工業
寺島得司　フィジー
社会基盤一般
片岡　工　ベトナム
人材開発

以上　敬称略）

編集部からのお願い

会員各位にはそれぞれの場所、地域で様々なボランティア活動をされて居られる方が多いと存じます。居住自治体行政への参画、所属されますNGO／NPO、グループでの活動と多様な社会貢献をされていることと拝察しています。

本SVニュースでは現在まで中川安隆会員の浦安市市民会議と、齋藤富貴子会員の中南米文化研究会での活動を紹介して参りました。今後も会員諸氏の創意と熱意溢れる諸活動を本紙で紹介して行きたいと考えていますので、会員諸氏からの積極的な投稿を歓迎いたします。

赴任地便り

フィジー事情

寺島得司（フィジー）

にこやかな笑顔でBulaの挨拶で始まるフィジーの生活。三百三十余りの島から成り立ち陸地面積が四国ほどのフィジー共和国で最大の島がViti levu島であるが、美しい珊瑚に囲まれた離島や本島西側のリゾート地と私達が生活の場としている東部地区では趣が異なる。空の玄関口である国際空港Nadimがあり、雨が少なく観光客が中心の西側に比べ、東側は大型観光船が寄航する海の玄関口の首都Suvaがあり、こちらは南東からの貿易風の影響で雨が多く庶民生活の匂いがする。

一昨年十二月に起きたクーデターの影響で観光客が減り低迷する観光業に次いで、この国の経済を支える産業であるサトウキビも西部と北部で栽培されている。そのサトウキビ栽培のため十九世紀末の植民地時代に英国により出稼ぎ労働者として送り込まれてきたインド人が全人口約八〇万人の四十％近くに達し、過半数を占めるフィジー人との人種対立に繋がっている。

勤勉で商魂逞しいインド人とのんびりとマイペースの生活を送るフィジー人、当然の事ながらフィジー経済はインド人の実質支配となる。片やフィジーの土地の八十五％程を占めるNative Landと呼ばれる先住民土地は憲法により国家が保護し、自由に売買が出来ない仕組みになっており、インド人にその所有は認められていない。私が配属されているNative Land Trust Board（先住民土地信託）は政府からの委託でそのフィジー人の土地を信託している組織であり、当然の如く（？）職員は全員フィジー人であると云う差別組織（？）の様を呈している。

フィジー人は概してデッカイ。縦にも横にもデッカイ。毎日彼らの中に居ると「ガリバー旅行記」の巨人の世界に来たような錯覚に襲われ、圧迫感さえ感じる事がある。

そのデッカさ・圧迫感が世界のラグビー界にその名を馳せさせている。十五人制以上に俊敏さを求められる七人制は特に有名である。デッカイ身体ににあわずステップ等の切れ味は鋭く、また少年の頃からラグビーに打ち込んでいる姿を目の当たりにすると、日本選手がいくら頑張っても歯がたたない事に納得してしまう。選手として国際大会等に参加する公務員は二十日間の年休の他に六十日の特別有給休暇が与えられるなど正に国を挙げてのラグビーであり、勝利を祝して歌われる国歌はキリスト教の聖歌をベースにした美しいハーモニーで心に浸み込む。

この国歌にはフィジー語によるものと英語によるものがあるが、二ヶ国語で歌われる国歌は全世界でフィジーだけではないだろうか？

フィジーでの生活は輸入品に頼らざるをせず、クーデターによる暫定政権下でありながら現地通貨の価値が下がらない事もありインフレ状態で物価が高い。“金持ち”日本人観光客も驚くほど物価が高い。又殆どの途上国ではJICA隊員の現地生活費が公務員の給料よりも高いが、フィジーでは逆に公務員の給料が驚くほど高い。クーデター後、外国からの援助が激減し国家財政が切迫している事もあり、その公務員の削減計画が進んでいる。ただでさえ少ないカウンターパートが更に少なくなる事が予想されると共に、他の途上国に比べ“決して貧しくない”フィジーに対してJICAボランティア活動のあり方を見直す時期にきているのではないだろうか？

ウェブページ編集室より

平成十八年五月の総会で会員から「ホームページを作って欲しい」との希望が出されました。当時、「コンピューター指導関連」で派遣されたシニアボランティアが小生以外に在籍していなかったことから小生が「たたき台」を作成、結果として「HP準備委員会」が発足し、同年七月から十一月まで毎月委員会を開催、中味の検討が行われました。

ホームページを掲載して貰うプロバイダーには無償でも広告付では面白くないと云うことで、最も費用が安くて尚且つJICAの系統の「JOCV・NET」に決まり希望のドメイン名が得られました。

JOCV・NET（青年海外協力隊員自主運営ネットワーク）は青年海外協力隊員・隊員候補生・OB／OG・一般参加者の間で自由に情報交換するためのネットワーク（コミュニティ）として設立されており、JOCV・NETの専用サーバの余剰リソースを分割し貸出されています。回線・機器維持の会費がありますが、一般の有料サービスに比べて格安で大容量のスペースが提供されています。

二〇〇六年十一月から当サイトの試験運用が始まり、二〇〇七年から正式に運用され今日に至っております。

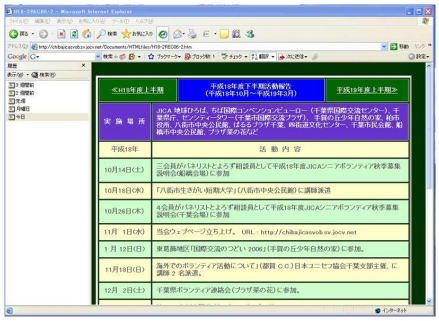
更新は通常毎月の役員会開催後に定期的に行い、主要ページの画像更新や寄稿文の掲載等は随時行っております。表紙の写真は日中、朝夕、夜で自動的に入れ替わり、挨拶文や日付もその時間帯に相応しい表現に切り替わります。合わせて更新日も表示されますがこれ等はすべてJava Scriptによるプログラミングで実現しております。

表紙の写真や「HOME」の写真は皆さんから提供された写真を採用しておりますので、「こんな写真は如何？」と思われるものがありましたらぜひご応募下さい。

当ホームページへのご意見、ご投稿は左記のメールアドレスにお寄せ下さい。

Shigeho_yamamoto@yahoo.co.jp

ウェブマスター　堀端俊雄）



現在の「活動記録」画面
開設後も各頁に試行錯誤が繰り返され進化が進み、画面が広がり見やすくなった

ボランティア活動報告

出前講座

国際理解　開発）教育推進の効果と地元会員のご努力により前年より大幅の機会増となりました。

『学校関係』

○四街道市旭小学校
平成十九年十二月十四日
対象　全学年百八十人
講師　白鳥貞夫会員
立会　影山 洵 会員、黒田昭太郎副会長

ある評価によるとバヌアツの国民の幸福度は世界一ということが活発な質問に繋がりました。

○千葉市立磯辺第二中学校
平成十九年十一月十四日
対象　一学年八十三名
講師　横田勝徳幹事
立会　上田義晴幹事

モンゴル全般についての講話と食品の安全性について説明がありました。スライドを用いた分かりやすい講座で、生徒からの質問が多く時間延長となりました。

『公民館・市民センター』

○千葉市轟公民館（稲毛区）
平成十九年十一月十三日
暮らしのしおり講座
講師　竹花 晃 会員
立会　山本茂穂幹事

シニアボランティア応募動機、活動内容（中岳博物館経営）、ネパール国情などの話をされ大変好評でした。質疑応答が十二件もあり、関心が高かったことが分かります。

○千葉市小中台公民館（稲毛区）
平成十九年十一月十七日
定年後の第二の人生を考える
講師　増田定雄幹事
上田義晴幹事

それぞれ「定年後の第二の人生に備えて」「ご恩返しの第二の人生」というテーマで講演され、好評でした。

○八街市中央公民館
平成十九年十二月五日
世界に目をむけよう、発展途上国ラオス
講師　後藤 優 幹事
立会　山本茂穂幹事

スライドとビデオを駆使してラオスの現状とシニアボランティアの活動を説明されました。

○酒々井町中央公民館
平成二十年二月六日
しすいタウンヴィレッジ講座　～国際社会～
講師　楠木孝雄会員
立会　黒田昭太郎副会長

国際協力ボランティアについてその基本からをスライド、豊富な配付資料により講話されました。受講者は非常に熱心で質疑応答により予定時間を三十分も超過するくらいでした。

○四街道市文化センター
平成二十年二月二十三日
海外でのボランティア活動と海外生活での体験談
講師　宮崎征士会員
立会　山本茂穂幹事

ミクロネシアへの赴任体験の講演とシニアボランティアへの勧奨をされました。

各地国際フェスティバル

平成十九年度は柏市と千葉市で催された生涯学習関係のフェスティバルに新たに出展参加し、参加会場が前年度より二箇所増えました。

各会場ではＪＩＣＡボランティア事業や当会の活動現場写真パネルを展示、シニア海外ボランティア応募相談、国際理解クイズの実施など地域住民の方々との交流、国際理解の促進に努めました。各会場の参加者は左記の通りです。

○東葛飾地区「国際交流のつどい　２００７」
平成十九年十一月十一日
手賀の丘少年自然の家
参加者）
木野本国際協力推進員

黒田副会長
大格、羽田、堀端、宮崎　征）
各会員

○生涯学習フェスティバル
ＩＮ県民プラザ（柏市）
平成十九年十一月十八日
さわやか県民プラザ

参加者）
梅谷、黒田
両副会長
岩谷、大格、羽田、堀端、武藤、山野辺
各会員

○浦安市国際交流・協力フェスティバル２００８
平成二十年一月二十日
ショッパーズプラザ新浦安

参加者）
品川会長
梅谷・黒田
両副会長
河合祥雄
実行委員
宮崎　泰）、市井、酒井　國）、酒井　徳）
各会員

ボランティア活動報告（続き）

○千葉市国際協力ふれあいフェスティバル２００８
平成二十年二月十七日
千葉市国際交流プラザ
（参加者）品川会長、上田、横田両幹事、児玉、齋藤（富）、酒井（徳）各会員

○千葉市生涯学習ボランティアパーク
平成二十年二月十九日～二十二日
千葉市生涯学習センター
（参加者）品川会長、上田、増田、山本、横田各幹事、齋藤（富）、津田両会員

千葉市生涯学習センターの勧誘で初参加しました。効果などはこれから検討します。

平成十九年度千葉県ボランティア家族連絡会

十二月二日（日）午後一時から五時迄、千葉市文化交流プラザで開催され、赴任国で活躍中の青年海外協力隊員、日系社会ボランティアの家族が参加されました。

当会からは後藤敏行会員が赴任国（ハンガリー王国）での活動状況を出席者にスライドを用いて披露しました。

相談員として品川会長、梅谷副会長、山本・横田両幹事が地域別のテーブルに入りました。

青年海外協力協会平成二十年新春交歓会

一月二十六日（土）午後四時半から八時迄、国際協力機構広尾センター三階講堂において関係各国大使館、外務省、国際協力機構、海外ボランティアOB多数の参加のもと、沖大幹東京大学生産技術研究所教授による「世界の水問題と日本」と題する講演を含め盛大に開催されました。

当会から品川会長、黒田副会長、有光・加藤・寺戸・武藤の各会員が参加しました。

また、会場の通路で当会概要と活動現場写真およびSVニュースを展示しました。

国際交流・国際協力ボランティア／国際理解教育養成セミナー

ちば国際コンベンションビューロー主催のセミナーに協力参加しました。これは県内の国際交流・国際協力ボランティアの活動促進や育成を図るための講座です。当会は二月三日（日）の午後一時より二時半まで「JICAシニアボランティアの活動の紹介」をテーマに講義を行いました。

まず「シニアボランティアの活動の実際」として津田正臣会員と岩谷宏司会員により任国での活動体験の講話があり、品川会長より当会の概要・創立の経緯が、上田事務局長より千葉市支部の活動、山本幹事からホームページ開設の経過説明がありました。

受講者は約四十五名で、国際協力・交流分野で既に活躍されている方もあり、真剣に聴講していました。

午後二時半からはJICA千葉デスクの木野本国際協力推進員により「JICAシニアボランティア制度について」の説明が行われました。

JICAよりのお知らせ

平成二十年春 シニア海外ボランティア「体験談&説明会」

国際協力機構（JICA）はシニア海外ボランティアの制度や内容について説明会を行います。当会からは会員がパネリストおよび「よろず相談員」として参加します。

シニアボランティアにご関心のある方はご参加下さい。

○四月十三日（日）
午前十時半～十二時半
会場　船橋市中央公民館六階

○四月二十六日（土）
午前十時半～十二時半
会場　千葉市幕張メッセ国際会議場三階

両会場とも午前十時開場です。なお、それぞれ同日午後二時より五時まで青年海外協力隊の説明会も開催されます。

CCB便り

着任してからあっという間に一年が過ぎました。先日の帰国報告会は強風で電車が動かなくなる中、なんとか無事に終えることができ、大変印象深い思い出となりました。今年度も活動を通してみなさんにお会いするのを楽しみにしています。

編集後記

SVニュース第八号をお届けします。本号は当会の出前講座や県内の国際交流関連のフェスティバル参加の機会が昨年より大幅増加で関連記事が増え、また会員の寄稿も活発で十二頁建になりました。

特別寄稿には、千葉大学の吉田教授から示唆に富む論文を頂戴しました。

本SVニュースは広く千葉県下の各機関にお送りし、独）国際協力機構のボランティア事業と千葉県JICAシニアボランティアの会の活動をご紹介しています。主な送り先は次のとおりです。

千葉県政策推進室国際政策グループ、千葉県国際交流センター、千葉県下各市町村、千葉市区役所、県内公民館・市町村教育委員会、市町村国際交流協会、県立・市立・村立図書館、千葉市生涯学習センター、さわやか県民プラザ、県立少年自然の家

本紙へのご意見、ちば出前講座のお問い合せは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
04-7131-5830（黒田）

千葉県国際協力推進員
043-297-0245（木野本）
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp